従来の心理学においてほめるというポジティブなフィードバックは、言語的強化子・社会的強化子などの用語によって表現される。しかし青木（2005）によると、ほめは非言語の形式、物品や金銭を与えるという形式により表されることもある。つまり前述の心理学用語は、ほめるというフィードバック全体の一部分しか表現できていない。それに対し「ほめ」という用語は心理学用語のようにフィードバックの形式に制限を持たず、実際のほめるというポジティブなフィードバックを与えられる場面を想像しやすいといった利点もある。そこで本研究ではほめるという行為を以後「ほめ」と表記し用いる。私たちは日頃から「ほめ」を用いることで何らかのよい影響を与えることができると認識しているが、「ほめ」が用いられる状況や「ほめ」を使用する人の考え方によってさまざまである。そのため高崎（2013）によると、意図の伝達や解釈がほめ手と受け手で異なることも起こりうると考えられる。このような「ほめ」への期待と実感する効果とのギャップを埋めるため、ほめ手と受け手の視点から「ほめ」の効果を検討することが必要だろう。そこで本研究は双方の視点からほめの効果を尋ねる、「ほめ」の強化力・持続期間・抵抗感の尺度を作成した。強化力とはほめられた時にどの程度「またそのようにやろう」という意欲が湧くかというものだ。持続期間とは相手にほめられた時にどの程度の期間、ほめ言葉の効果が持続するかというものだ。抵抗感とは相手をほめる時にどの程度「抵抗」をもつかというものだ。本研究の目的は、因子分析により「ほめ」の強化力・持続期間・抵抗感に影響する因子を探索することだ。今回は私立文系の大学生を対象とした。対象の授業の履修者を対象に調査依頼をかけて、グーグルフォームの調査に回答してもらった。ほめ言葉は本間・祐川（2007）のほめ言葉集を参考に30個のほめ言葉に対する、強化力、持続期間、抵抗感を尋ねるオリジナル尺度を用いた。因子分析の結果、ほめの強化力・持続期間・抵抗感、それぞれに４つの因子が見られた。まず「ほめ」の強化力には、情感的ほめ・実行力ほめ・活動性ほめ・外見ほめの因子があった。４因子のうち、最も情感的ほめは強化されやすかった。青木（2005）によると、愛情・感情のほめが動機づけを高めるとされており、今回の結果もその影響を受けたと考えられる。それに対して外見ほめは強化されにくかった。初対面でもわかるような見た目の情報を指摘されても、受け手の印象に残りづらいと推測される。また受け手が、外見ほめを社交辞令・おだてとして解釈する可能性もあるため、強化されにくいことが考えられる。続いて「ほめ」の持続期間には、行動的ほめ・人当たりのよさほめ・個人特定的ほめ・性質ほめの因子があった。４因子のうち、最も個人特定的ほめは持続しやすかった。仁平（2016）によると、相手の性格や置かれている立場・状況に応じたほめというものは、持続的な関心を持たないと行えないものとされている。そのため受け手は、ほめ手からの持続的関心を知ると喜びを感じるため、そのような感情が持続期間に影響を与えたと推測される。それに対し行動的ほめは持続しづらかった。明細化されない行動をほめる表現は印象に残らず、持続期間が短いと考えられる。最後に「ほめ」の抵抗感には、会話ほめ・個人的ほめ・行動特徴ほめ・感性ほめの因子が見つかった。４因子のうち、最も個人的ほめは抵抗感が大きかった。特別な存在だと伝えたり、存在自体を肯定したりすることは、親密な関係でないと相手の本質を理解できない場合が多いため、抵抗感が高かったと推測される。それに対して会話ほめは抵抗感が小さかった。話を聞く態度、説明する力など、会話からの情報は見つけやすく、その会話の場でほめることができるため、抵抗感が小さかったと考えられる。